

タイトル	高山寺・義淵房靈典と覚蘭院代々(一)(退職記念)
著者	徳永, 良次
引用	北海学園大学人文論集, 38: 118-84
発行日	2008-03-00

高山寺・義淵房靈典と覺蘭院代々（一）

徳 永 良 次

はじめに

明恵上人開基になる高山寺は、上人示寂の直前に、その置文（後述）により空達房定真を寺主、義林房喜海を学頭、義淵房靈典を知事、さらに説戒に円道房信慶と法智房性実をあて、高山寺の経営についての諸役を定めたことが知られている。^①これら（一）の僧侶らによつて高山寺は真言と華嚴の両学を修める寺院として存在していくのであるが、示寂後十数年を経て大規模な聖教の再編成とそのための目録作成が行われた。この時に中心的な役割を果たしたのが、寺主空達房定真と知事義淵房靈典、さらに十眼房長真である。この明恵上人の直弟子たちは、それぞれが塔頭を持つことも多く、このことは高山寺に現存する記録から知ることができる。詳細は後述するが、空達房定真は方便智院、義林房喜海は十無盡院の第一世として著名であり、「方便智院」や「十無盡院」の印記を押した聖教が多く高山寺経蔵に現存している。諸役として定められた他の院主を見れば、義淵房靈典が覺蘭院、円道房信慶は三尊院、法智房性実（二）は善財院のそれぞれ開基となるのである。つまり、明恵上人示寂後の高山寺は上人の遺言通り、ある意味「集団指導体制」で経営がなされており、中でも先に挙げた僧侶が大きな役割を果たしていたと考えられる。

知事とされた義淵房靈典が明恵上人示寂後の高山寺経営、とりわけ目録作成活動について多くの貢献をしたことについては拙稿でも一部触れたことがあり、^②靈典の事績および彼以降の覺蘭院の系譜が高山寺においてどのような位置にあったかについて検討するこ

とは、高山寺に現存する聖教の性格を検討する上でも重要な意味を持つと考えられるのである。つまり、高山寺に現存する聖教群はその質・量ともに他の寺院を凌駕するものであるが、それら聖教の集積と整理、保管の状態を明らかにしてこそ、高山寺資料の国語学的価値も定式化できるものと考えられる。

そこで、本稿では目録作成に大きく関わったと考えられる義淵房靈典の事績を再度「聖教目録の作成活動」と連携させた視点で再検討し、彼の流である覚蘭院の系譜の事績を纏めてみたい。

一

高山寺の僧坊の代々についての記録はいくつか現存している。最も古いものは「高山寺縁起」(高山寺聖教類第一部299)の巻末に書き込まれたものである。この資料自体は室町時代永正十一年(1514)、方便智院の弁朝の書写にかかものであるが、代々の記録は「高山寺縁起 解説」に「巻末付載の高山寺諸院歴住略次第(仮題)は縁起本文と筆者を異にし、室町末期に、本書の余白を用ゐて記されたものと思はれ、」(「高山寺縁起 解説」739頁)とあるように少なくとも数十年の開きがあり、誰が、何のためにこの部分に記載したものか詳細は不明である。以下に、高山寺縁起巻末付載の諸院代々を示す。

東坊

方便智院代々

空達上人、定真、建長元八二 入滅、七十七	仁真上人、玄密房、嘉祿四 廿一入、八十六
仁弁上人、空明房、文和二八廿五 入、八十四	弁耀上人、空悟房、嘉慶四 四廿二入、七十四
仁耀上人、永明房、応永廿四一 入、六十三	然真上人、英観、六月廿一日 入
弁季上人、入、正月廿六日	観明上人、弁海、永正十二 十一二入、八十二
明律上人、弁朝、天文三七五 入、四十五	(別筆) 「兼真」

中坊
觀海院代々 開田御室御住房、

上見上人、行弁、建長八八六
入滅

觀惠上人、澄基

道明上人、澄高、十月三日
入し、

明觀上人、永真、延文三
正五入し、七十五、

觀禪上人、澄空、貞治四十廿六
入し、六十、

明浄上人、実慶、

浄栄上人、弘源、正長三三十九
入し、

良祐上人、

關伽井坊
十無盡院代々

開山
義林上人、喜海

恵月上人、

恵林上人、

了月上人、

林明上人、

了恵上人、

禪証上人、高祐

行英上人、

禪師御房
沙門慶俊、永享七二六
歳廿一

明円上人、禪師御房、享徳元十二三
入し、十。七歳、

報恩院代々

山本坊明心上人静海、開田准后御附弟也、
良平公息云々、

院主第一
明順上人

明信上人

道恵上人

良明上人

道禪上人

英明上人

理浄上人

池坊

覺蘭院代々

靈典

義淵上人

明悟上人

顕恵上人

照空上人

信明上人

義顕上人

定明上人

院禪上人

善財院代々

法智上人^{第一} 証淵上人 相明上人 朗智上人 想淵上人 朗明上人

真祐上人 竺誉上人、^{永正十四}
八月五日入山、

三尊院代々

円道上人^{第一} 明寂上人 浄林上人 練明上人 信証上人 法乗上人

西本坊代々

敬恵上人^〇 心輪上人 仁恵上人 信空上人 教空上人

了空上人、^{康正元八廿三}
入山、

北坊代々

明願上人 尊寂上人 円空上人 明融上人 尊恵上人 了察上人^{六月九日}

教真上人^{元亨元十廿一}
入山、^{廿九}

清水坊代々

十恵上人 十蜜上人 証性上人 証恵上人 順空上人 行順上人

観乗上人 真耀上人 一学上人^{六月十二日入山、}

妙峯山代々

乗信上人 恵信上人 乗悟上人

山坊代々

定勝上人 禅性上人 慈空上人 良淳上人 宗祐上人永享三十一入滅

入江坊代々乗達房ト云了

法淳上人 真誉上人永享十三正晦入し 光誉上人 光秀上人永正二正十四

次に、「高山寺代々記」（高山寺経蔵第四部第一九九函1）がある。この本文については、すでに宮澤俊雅氏により全文の翻字が紹介されているものである。以下に宮澤氏による解説を略述する。

本書は『高山寺経蔵典籍文書目録第四』に『高山寺代々記』（第一九九函1号）として登載されているものである。（中略）、破裂汚損が甚だしく表紙の外題は「高山寺」の三字を確認し得るのみで、果してその下に「代々記」とあったかどうか定かでない。料紙も湿気を吸い込んでか軟弱になっており、もとは竪二九・五糎、横二〇糎の袋綴装であるが、綴じ糸は全く失われている。裏表紙と見做した最終丁に見える「元□二十」が書写識語と取れなくもなく、そうとすれば、本書は元文二年（一七三七）か元治二年（一八六五・慶応元年）の冬の書写ということになる。（以下略）

（宮澤俊雅「高山寺代々記」平成六年度『高山寺報告論集』5頁）

このように、本資料も成立を示す記録がはつきりせず、詳細は不明であることは、先の「高山寺縁起」巻末付載の記録と変わりが無い。

さらに、村上素道師述作の『梅尾山明恵上人』巻末の付録部分（三二八頁）にも「高山寺代々記」として東坊方便智院代々を初めとして僧坊の代々を記しているが、宮澤氏も指摘されているように、この元となった原資料の所在は不明である。村上師の引用末尾に「寛永廿年〇月二日書之（高山寺文書）」と記されているが、これに該当するものは現在経蔵には見あたらないのは残念である。^{（3）}

これらの僧坊代々を見ると、大まかには一致しているが本文には異同も多い。これらの検討については別稿を用意したいが、小異

は別として、この諸院代々を見ると、方便智院を始めとして、観海院、十無盡院、報恩院、覚蘭院、善財院、三尊院、西本坊、北坊などの僧坊は高山寺の早い時期には存したと考えられ、それぞれが代々相承しており、少なくともこれら資料が作成された室町時代末期まで廃絶せず存続している僧坊も少なくない。

次に、これら代々の中から目録作成活動に重要な役割を果たした僧侶とその僧坊を、方便智院第一世空達房定真、十眼房長真、そして覚蘭院第一世義淵房靈典について、先学の論考を元に見ていくこととする。

二

先に述べた三名の僧侶は明恵上人示寂後、集団指導体制をとって高山寺経営をしてきたのであろうが、聖教の管理と目録の整備については具体的な記録が見あたらない。⁽⁴⁾ 現存する高山寺内に残されている聖教目録を見ると、高山寺初期に作成したと考えられる目録に記された聖教類の記載点数は、

高山寺聖教目録	869
法鼓臺聖教目録上	309
法鼓臺聖教目録中	799
法鼓臺聖教目録下 ⁽⁵⁾	570
高山寺経蔵聖教内真言書目録	657
方便智院聖教目録(江戸写本)	1160

となっており、この中には『高山寺聖教目録』に一切経が二部記載されるなど、高山寺草創期の蔵書量は膨大であったことがわかる。経蔵造立当時の蔵書については、『高山寺縁起』(高山寺聖教類第一部299)に次のように記されており、往時の様子を知ることがで

きる。

（9才）

一、經藏二字 東經藏

本是羅漢堂東辺立之、而羅漢堂造立之刻、於石水院西岸移造之、且怖火難遠人煙也、

奉納一切經、附貞元錄

合大小乘經律論及賢聖集等、

惣一千二百三十八部

合五千三百五十一卷内

又本四十四卷、見在五千三百七卷、信行禪師三階仏法等已下四十四卷火、^{（欠）}而相当上人十三年

之忌辰、続彼欠本満一部畢、

此外、華嚴、天台、法相等章疏并真言書籍、仏像等納之、目錄別在之

（以下略）

（10才）

西經藏

奉納置一切經、唐本、福州本云々

合大小乘經律論賢聖集等六千三百三十九卷、

中央奉安置木像大日如来像一体

右、一切經并經藏、法性寺刑部入道、不知実名、所沙汰進也、

東西経蔵合わせて優に一万点を超える聖教が納められており、東経蔵の部分に「目録別在之」とあるように、聖教目録も整備されていたことがわかる。ただ、これは明恵上人示寂後十数年を経た時(建長年間)の高山寺の状態である。⁽⁶⁾ 経蔵や目録がこのように整備される以前の状態については今のところ部分的にしかわかっていない。断片的に判明していることで見ても、相当数の聖教が集積されていたことは判明している。そして、これらが何の管理もされず放置されたとは考えにくく、実際、禅浄房(空弁)⁽⁷⁾が、高山寺の聖教(全部か一部分かは不明ながら)の管理をしていたという事について拙稿で検討したことがある。⁽⁷⁾ 禅浄房関係の聖教目録が現存する高山寺聖教目録としては、最古のものであり、それは明恵存命中から作成されていたことも想像できるのである。

このような過程も永くは続かず、明恵上人の後を追うように禅浄房も寂してしまい、この後さらに数年を経て大規模な聖教の整理と再編成、それに伴う聖教目録の整備が高山寺の一大事業として行われた。⁽⁸⁾ 『高山寺縁起』に示されたような整備された状態の姿になったのは、明恵示寂後十数年を経た建長年間である。

この時作成された聖教目録は、先に挙げたものの内、『方便智院聖教目録』を除く三種類である。『方便智院聖教目録』については作成時期、初期の状態、作成者ともに現時点では不明という他はない。⁽⁹⁾ 後考を待ちたい。この目録作成活動に関わったのは諸役の中では、義淵房靈典のみである。なぜなら寺主空達房定真と学頭義林房喜海は建長二年に相次いで示寂しているからである。そのため目録作成は、残された高山寺知事である義淵房靈典が中心とならざるを得ない状況になったと考えられる。

つまり、高山寺の聖教がどのように整理され、現代にまで受け継がれてきたか、その源流を探るには義淵房靈典の高山寺における位置と事績を詳細に検討することが極めて重要となるであろう。

三

ここでは空達房定真と十眼房長真については、先学の論考を再述していくことで、その事績を見ていくにとどめ、主として義淵房靈典について検討していくこととする。

定真

空達房定真の事績と高山寺に現存する資料との関わりについては、小林芳規氏によって詳細な検討がなされている。それによると、定真の書写・加点に関わる典籍は高山寺本の中心的な部分を占めていると指摘されており、次のようにまとめられている。

（略）明恵の高弟の中では、定真とその流とが主であり、他の同行の典籍の現存するものは量も少なく、その書写事情も詳らかでないものが多いのである。

高山寺経蔵の鎌倉時代の典籍は、奥書・識語から見ると、如上（省略）の定真とその流、並びに明恵とその同行、即ちいずれも明恵関係者の典籍が質・量ともに中心となっている。（小林芳規「高山寺経蔵の鎌倉時代の典籍について」『高山寺典籍文書の研究』1980年12月 東京大学出版会一〇八頁）

右にあげたように、高山寺における鎌倉時代成立にかかる資料の実態については、量的には小林氏の指摘の通りであるが、質的な点については土井氏の論考には次のようなものがある。⁽¹⁰⁾

定真の教学活動の特徴は、諸尊法の伝授（伝受）が教学活動の大半を占め、講師として講説活動を行った形跡が認めがたく、特に華嚴関係典籍に対しては、講説、講説の聴聞のいずれにも接点が認められない。（92頁）

このように、量的には高山寺を代表する定真およびその法統にある方便智院の流であるが、質的には高山寺で行われた講説、および華嚴関係の宗教的活動にはほとんど関与していないことが知られるのである。つまり高山寺の教学活動を総体的に把握するためには定真とその流以外の僧侶の活動について現存する聖教だけではなく、古文書やその他の活動記録類からも総合的に検討する必要がある。

目録作成活動との関わりで考えれば定真は、寛喜三年に『聖教目録浄土宗』を作成したことは特筆すべきである。現存していないが同時に『聖教目録浄土宗』も作られたのは確実であり、この時期の聖教の管理について中心的役割を担っていたと思われる。

長真

十眼房長真については、奥田勲氏、宮澤俊雅氏によりその事績が紹介されている。⁽¹¹⁾ここでは宮澤氏の紹介を引用しておく。

十眼房長真は、建久六年(1195)生れ、その出自は未詳である。貞応二年(1223)、二十九歳の時、高山寺の西房の南面で『常修仏光観略次第』を書写してゐる。また、同じ年の九月に高山寺で行はれた貞元華嚴經の書写に参加し、卷第十九・卷第廿九・卷第卅九を書写してゐる。寛喜元年(1229)乃至同二年(1230)に、同じく高山寺で行はれた新訳華嚴經の比較にも加はり、卷第五・卷第廿一・卷第卅五・卷第卅九・卷第七十七を比較してゐる。寛喜二年八月には梅尾説戒に着座してをり、また『却廃忘記』にもその名が見え、明恵上人の晩年に近侍して、付法も直接上人から伝授した模様伺へる。寛元二年(1244)正月十九日明恵上人十三回忌の供養には、他の多くの人々と同様に諷誦文を記してゐる。そして、建長三年(1251)に本書真言書目録を校勘してゐる。時に五十七歳。没年は未詳である。(宮澤俊雅『高山寺経蔵古目録』三〇二頁)

長真は、奥田・宮沢氏の御論考にあるとおり高山寺内での詳細な活動は未詳であり、寺内に塔頭も持たなかったのである。

靈典

義淵房靈典についても、既に奥田勲氏の御論考に詳述されているし、先に触れた小林芳規氏も言及しておられる。また、古くは村上素道師、田中久夫氏の紹介もある。⁽¹²⁾

筆者もこの先学の諸研究・論考を基盤として高山寺における聖教目録の成立との関係で紹介したことがあるが、⁽¹³⁾ここでは奥田氏を

始め先行研究に記載されている靈典についての事績を再述していきながら整理していく。
まず、義淵房靈典の生没年については、

「高山寺代々記」によれば、靈典は建長七年（1255）七十六歳で没している。したがって治承四年（1180）の生まれということになるが、生国その他出自に関しては不明である。（奥田勲『明恵』175頁）

とあるように、明かでない部分が多い。その生没年にしても『明恵』で依拠している「高山寺代々記」には別本もあり、生没年が異なる。それには、「建久元年（1190）誕生、建長十年入〔滅〕七十一」とあり、¹⁴生年が十年ずれている。しかしながら、靈典についての生没年を含めた出自はこれ以上明らかにすることは難しい。

その後の靈典について、奥田氏の『明恵』では以下のように述べている。

いつ頃から寺院生活をはじめたかも明らかではないが、同じ「代々記」に「上覚ノ付法」とあり、善財院血脈にも行慈の法流にあることが示され、置文にも「義林房義淵房、当初の高雄の久住也（原漢文）」とあることによって、おそらくはじめ高雄に住し、上覚房行慈に師事したものと思われる。明恵と近づきを得たのも、高雄の上覚のもとであったことが想像される。（奥田勲『明恵』175頁）

奥田氏が靈典の事績について依拠した根拠とは次の資料の記述によるものである。

僧高弁高山寺置文案（高山寺聖教類第一部三〇五）

此中義林房・義淵房、当初之高雄之久住者也、当山又依為彼一院、兩人居住之、

また、後に詳述するが、靈典は神護寺の僧行慈の法脈を受けており、これも高山寺現存資料から確認することができる。このように見てくると、靈典の生年が建久元年とする別本の「高山寺代々記」の記事が正しいとすると靈典九歳の時に明恵と神護寺において知己を得たことになってしまい、無理がある。やはり、治承年間生まれと考えた方が妥当と思われる。

明恵上人晩年においては、空達房定真、義林房喜海らとともに寺内の諸役が定められ、靈典は知事とされた。知事とは寺内の庶務の統括であり、空達房定真が寺主で高山寺の先頭に立ち、義林房喜海が学頭として学問上の采配を振るうのに対して、その他の高山寺経営について実質的な役割を担うこととなったのである。⁽¹⁵⁾

以上が、先行研究で検討された義淵房靈典についての事績の概略であるが、これを現存資料からさらに検討していくこととする。これら資料には様々な内容のものがあるので、今、かりにA血脈、Bそれ以外の活動を示す記録、とに分ける。それ以外の記録とは、靈典による聖教の書写、校合、所持、それに資料から見られる活動記録等である。これを年紀の明確なものから年代順に示しつつ検討していく。このことによつて、靈典の事績、特に、明恵を頂点とする高山寺教団に特有の事象、華嚴と真言の兼学である指導者の下でどのような宗教的活動をしていたかについて見ていくこととし、靈典の宗教的基盤及び活動の内容について検討する。

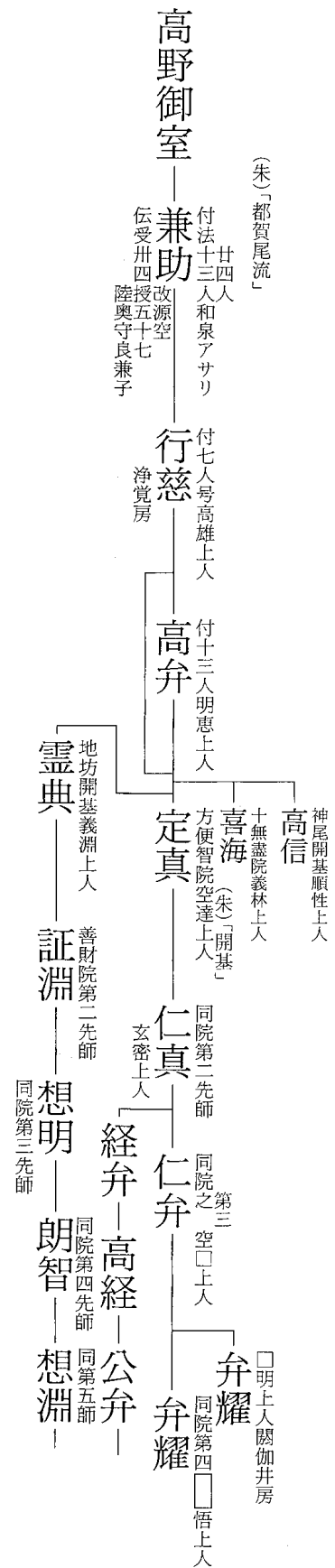
A 「靈典」の名前がみられる血脈

高山寺には義淵房靈典の名前が見られる血脈が複数現存している。以下に資料名とともに血脈の該当部分(あるいはすべて)をあげる。

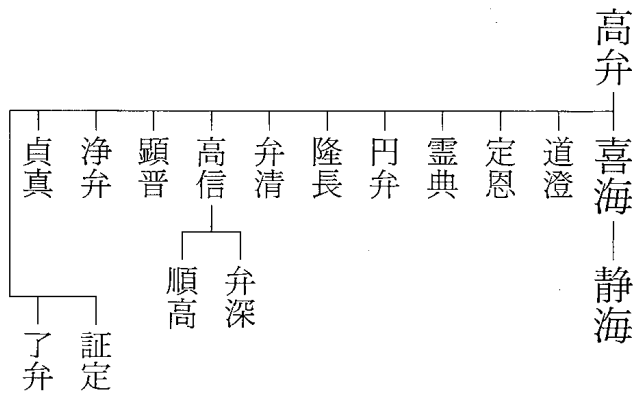
1 持戒清浄印信 一卷 (第四部一四八函67)

文殊師利菩薩 高弁上人／靈典覚園院 同院明悟上人 盛遍 良含 了然 法円 本地／善暁 玄海 湛叡 高恵 円恵 賢為／杲宝東寺観智院
 賢宝 融然 祐闊 栄济 信嚴心蓮院法印 順兼上人 心蓮院法印 宥盛 齋怡心蓮院法印 菊淵 宥嚴岩本 心蓮院僧正 永弁

2 広沢血脈梅尾流 一卷 (第四部一四八函19〔9〕)



3 華嚴血脈 一鋪 (第四部一四八函42)



4 梵網菩薩戒本印明印 卷末 (血脈事) 一卷 (第四部一四八函 64)

血脈事
 義林上人——惠月上人——惠林上人——了月上人
 明恵上人——義淵上人——明悟上人——円証上人——静基上人
 乗信上人憲伊大徳嚴範実憲

林明上人——了恵上人——禅証上人——恵浄上人——乗意上人

真祐

(以下別筆)

円証上人然經 栄濟——信嚴——竺譽

弁助——禅雅

永享九年十月朔日以尾崎御房御本書写之 真祐

5 高山寺善財院血脈 (軸物唐櫃 20)

寛助——永嚴——覚印——能意——勤杲——性実法知上人善財院開基

高野御室覚法 兼助阿闍梨 行慈改源空 靈典

高弁明恵上人 靈典義淵上人

禅智証淵上人 珍恵朗智上人

右の五点が義淵房靈典に関係した血脈である。

1 は正和三年(1314)に鎌倉・称名寺の僧湛叡が伊勢(一説に伊賀)国阿保庄地藏堂において行願房玄海から受けた印明を記したことが本奥書から知られ、それを寛永年間に仁和寺の顯証が書写し、さらに正保四年に永弁が書写したものである。

これを見ると、この印明は明恵上人から義淵房靈典が授けられて、靈典から覺蘭院第二世である明悟へと伝えられたことがわかる。その後、高山寺を出て称名寺湛叡、東寺観智院杲宝、さらには仁和寺へと伝えられていくことが知られるのである。この印明の本説となったものが「観自在菩薩怛多唎随心陀羅尼經」であり、主として真言宗系統の僧侶に伝えられていく。その起点となったのが覺蘭院第一世の義淵房靈典なのである。本資料には靈典の記したとされる、印明の記事もあるが高山寺経蔵には現存していない。⁽¹⁶⁾

2 は、室町時代末期の卷子本で「高山寺／地藏院」の署名がある。ここに真言宗広沢流の血脈のうち梶尾流の血脈が書き継がれているが、高弁の後に、靈典―証淵―想明―朗智―想淵―朗明と法統が続いていく。しかし、証淵は覺蘭院の系譜ではなく、法智房性実を第一世とする善財院の代々であり、属する塔頭が異なる。しかもその法統は第六世の朗明でとぎれている。つまり、靈典は広沢流を明恵から受けて、それを伝授したのは覺蘭院代々ではなく、善財院第二世証淵に伝授し、その後善財院への代々に相承されていたことがわかる。

3 の血脈は、華嚴系の血脈としては珍しいもので、室町時代末期の書写になる豎系図である。これには高山寺諸院代々の中では義林房喜海が筆頭にあげられ、その他は靈典のみが記されており、空達房定真を始めとする主だった僧侶はその法脈には記されていない。高山寺に直接関わりのある僧侶は弁清と高信くらいである。ただ、定恩は高山寺僧ではないが、明恵が紀州にいた頃の同行者と同名であり注目される。(五五頁 資料6参照)

4 は高山寺に現存する血脈としては古いもののひとつで、室町時代永享九年(1437)、真祐の書写にかかる卷子本である。その後別人により、追筆されている部分があるが、真祐は善財院の第七世にその名が見える僧侶であり、奥書によれば「尾崎御房御本」をもつて書写したことが知られる。尾崎坊とは「高山寺代々記」によれば三尊院のことであり、年紀から考えるに、第六世の法乗房嚴空(応永十五年寂)所持本からの転写であろうか。明恵上人から義林房喜海―弁清(恵月)―経弁(恵林)へと続く十無盡院の代々が記さ

れていることから華嚴系の法統を示したものと見られるが、一方では明恵上人―義淵上人(靈典)―明悟上人―円証―静基上人と続くのである。明悟上人は覚園院の第二世であるが以後の法統はどのような僧侶であるか不明である。高山寺代々の名前に該当する人物は見えない。いずれにせよ、明恵上人から続く華嚴系の血脈を示したものと興味深い資料である。

5は、高山寺の善財院代々を示すものと見られるが、先の2と同様の法脈がみえる。つまり善財院の代々は一般には、法智房性実―禅智―澄実―珍恵―高智―澄意と続くものであるが、この流れに加えて、高弁―靈典―禅智とあり、靈典の法脈も受けていることを示している。これを見るに、2の広沢梅尾流血脈と同一であり、真言宗の系統を示すものである。

以上の血脈を見るに、1・2・5が真言宗系統の血脈(2と5は内容的には同じ)が示され、3・4は華嚴血脈に属するものである。よって、義淵房靈典は明恵上人から華嚴と真言の両方の法脈を受け継ぎ、相承していると見られるのである。これは、空達房定真が主として真言宗広沢流の法流に属し華嚴血脈に見えないこと、義林房喜海が華嚴血脈の系統に属しているのみで真言宗系統の血脈は一切見えないことと比較して非常に幅広い活動をしていた事が知られるのである。

B 靈典に関する記録

次に、高山寺に現存する資料から、義淵房靈典の事績(書写、校合、所持、その他活動記録)を跡づけてみたい。

明恵上人と靈典の初期の接点を示す資料は先述したように『明恵上人置文』の記事以外、高山寺経蔵には見あたらない。先行研究でもほとんど明らかにされていないのが現状である。¹⁷⁾

しかし、建仁頃には明恵と行動をともにしていた記録が出てくる。以下にあげる。

建仁元年に明恵に従っていた僧侶は十人であった。江戸時代の写本であるが次のような記事がある。元は板に書き込まれているものを写したものである。

6 学問印信 一卷 (第四部一四八函32)

定 大行事須菩提大阿羅漢、

毎日ノ学問、印信次第

成弁ノ喜海ノ定恩ノ性実ノ靈典ノ永道ノ海禪ノ顯真ノ弁操ノ真海ノ顯印

右ノ諸衆、若ハ於テ經論ニ、若ハ於テ章疏ニ、毎日披覽シ三枚ヲ、並ニ誦シ五教章半卷ヲ、其後各々可レ被ル杜ニ一穴ヲ為中印信ト上。(以下略)

建仁元年(1201)九月一日 勸進伝灯大法印 成弁

これによると、靈典は義林房喜海から数えて四番目に記されており、明恵と同行して毎日經論もしくは章疏などを三枚読み、五教章を半卷読むことを日課とし、板に書かれた名前の下に十個の穴を開けてあるうちの一つずつを塞いで行くことで、学問の印信(証拠)とすることが記されている。この時、明恵(成弁)ならびにこの印信に記された僧侶達は紀州にいたことが判明している。それは、「華嚴唯心義」(第四部一〇一函7)に

7 建仁元年(1201)二月廿一日ニ成弁ミニヤマヒアルニヨ／テ□ヲ、ク灸治クハフソノアヒタ療治ノタメ／ニ糸野前兵衛尉藤原ノ宗光ノ家ニア□ (以下略)

とあり、糸野に滞在していたことがわかる。また、「高山寺明恵上人行状(漢文行状) 卷中(7ウ)」(第四部一〇一函1〔2〕)に

8 建仁元年(1201)十一月初・奉ル図ニ写シ善財善知識ノ唐本一之日・仏師俊賀之家ノ縁ノ辺ニ此鳥飛来更不驚人ヲ・絵師五六并ヒニ同法二人喜海靈典同見レ之・絵師染筆ヲ図此ノ鳥形一之間在図レ之・

とあり、俊賀(この時、明恵と紀州にいた)の元に行き、「善財善知識ノ唐本」を描いてもらうために義林房喜海と義淵房靈典が依頼した、という記事である。さらに翌年、建仁二年九月一日に明恵上人が「華嚴入法界頓証毗盧遮那字輪瑜伽念誦次第」(第一部234)を書写した奥書に次のようにあることから、依然として紀州に滞在していることが知られる。

9 于時建仁二年九月一日夜／子時於紀州糸野草洞集／之／金剛乘末葉兼花嚴末／学非人成弁生年三十歳

これらの記事から考えるに、靈典二十一歳の建仁元年には既に明恵上人に従って高雄を出て同行の僧侶とともに紀州周辺にいたことが判明する。そして、8の記事から「善財善知識」にまつわる仏画を依頼したこと、9の奥書などから見て華嚴に関する活動をしていたことが伺われるが、9の明恵による奥書に「金剛乘末葉兼華嚴末／学非人成弁生年三十歳」とあることから、明恵上人とともに華嚴・真言両流にわたる宗教的活動を行っていたのであろう。

建仁の末から元久にかけても靈典に関する記事ならびに書写にかかわる資料がある。

10 高山寺縁起 (32ウ) (第一部299)

一、神谷後峰

右、建仁末比、上人親属等依^テ彼^{被ルニ}勅^ヲ勘^被、彼召下関東之刻住此所、石垣、田殿両庄之間、有一山寺、称神谷^ト、其後峯登十四五町、有高峯、号鷲峯^ト、此峯麓立草舎、修大仏頂法、其下去一町許構行羽舎、靈典義淵房於此所給仕矣、

11 金剛結護普通諸部 一帖 (四部一八五函132)

○鎌倉時代元久二年(1205)写、靈典筆

(第一紙) 元久二年八月六日於高橋之家／書写了 執筆僧靈典

12 題未詳 一帖 (四部一八五函134)

○鎌倉時代元久二年(1205)写、靈典筆

(奥書) 写本云／保元二年十月二日於勤修寺西明院住房書了／僧智海 (以上本奥書)

元久二年(1205)八月十二日於高橋之家寫了／執筆求法僧靈典(以下略)

13 漢文行狀 卷中(53ウ) (第四部一〇八函1〔2〕)

同(元久二年1205)十二月比・依_テ月輪_ノ禪定殿下_ニ懇_ニ切_ニ仰_ニ・勤_ニ行_ニ星供_ニ七ケ日_ニ・始_ニ兩_ニ三度_ニ上人_ニ自_ラ被_レ修_レ之_ヲ・靈典_ノ勤_ニ承_ニ仕役_ニ候_ニ一_ニ二_ニ間_ノ外_ニ・

10は、「高山寺縁起」に記されている明恵上人ゆかりの地である「紀州所々遺跡」の一節である。明恵がこの神谷の地に「草舎」を建て、自身の一族である湯浅氏にかかった災難(勅勘)を取り除くために大仏頂法を修している時に、靈典が近くで給仕していたことを記している。さらに、11と12は同年同月に靈典が高橋の家で書写したものである。現状では、これが靈典自筆本としては現存最古のものであろう。靈典二十五歳である。

13は明恵上人が「月輪_ノ禪定殿(九条兼実)」のために星供を修した時の承仕をした、という記録であり、星供は真言密教の修法であり、歴史的に明恵上人が勤めたのが古い記録に属するものである。ここにおける靈典の活動はこれらの修法と書名を見るに真言宗系統のものであることは明らかであり、この時期における靈典の華嚴・真言両方に渡る幅広い活動実態を示すものである。

次に挙げる資料群は華嚴宗の根本教典である華嚴經に関わるもので、靈典による華嚴經校合・書写の活動実態を示すものである。

14 大方広仏華嚴經第六十四 一卷 (四部一三函14)

(奥書) 校了

(別筆) 承元三年(1209)十二月二日以唐本校之了 靈典

・大方広仏華嚴經第七十 一卷 (四部一三函15)

(又別筆) 承元三年(1209) 十二月三日以唐本校之了 靈典

・大方広仏華嚴經第七十四 一卷 (四部一三函17)

(奥書) 校了

(別筆) 承元三年(1209) 十二月四日以唐本校之了 靈典

15 大方広仏華嚴經第六十一 (新訳華嚴經) 一卷 (四部一四函24)

(別筆) 承元三年(1209) 十二月一日以唐本校之了 靈典

・大方広仏華嚴經第六十三 (新訳華嚴經) 一卷 (四部一四函25)

(別筆) 承元三年(1209) 十二月一日以唐本校之了 靈典

・大方広仏華嚴經第六十七 (新訳華嚴經) 一卷 (四部一四函26)

(別筆) 承元三年(1209) 十二月三日以唐本校之了 靈典

・大方広仏華嚴經第七十五 (新訳華嚴經) 一卷 (四部一四函27)

(別筆) 承元三年(1209) 十二月四日以唐本校之了 靈典

・大方広仏華嚴經第七十九 (新訳華嚴經) 一卷 (四部一四函28)

(別筆) 承元三年(1209) 十二月五日以唐本校之了 靈典

16 大方広仏華嚴經第三・四 一帖 (四部一六函2)

(奥書末尾) 于時建曆元年(1211) 六月一日已尅也／花嚴宗沙門靈典

・大方広仏華嚴經第五・六 一帖 (四部一六函3)

(奥書末尾) 于時建曆元年 (1211) 六月十一日午尅也／花嚴宗沙門靈典

・大方広仏華嚴經第七・八一帖 (四部一六函4)

(奥書末尾) 于時建曆元年 (1211) 六月廿三日午尅也 花嚴宗沙門靈典

・大方広仏華嚴經第九・十一帖 (四部一六函5)

(奥書末尾) 于時建曆元年 (1211) 七月□日子尅也 花嚴宗沙門靈典

・大方広仏華嚴經第十一・十二帖 (四部一六函6)

(奥書末尾) 于時建曆元年 (1211) 七月七日午時也 花嚴宗沙門靈典

・大方広仏華嚴經第十三・十四帖 (四部一六函7)

(奥書末尾) 于時建曆元年 (1211) 七月十八日巳尅也 花嚴宗沙門靈典

・大方広仏華嚴經第十五・十六帖 (四部一六函8)

(奥書末尾) 于時建曆元年 (1211) 七月廿八日午尅也 花嚴宗沙門靈典

・大方広仏華嚴經第十七・十八帖 (四部一六函9)

(奥書末尾) 于時建曆元年 (1211) 八月「」日辰尅也／花嚴宗沙門靈典

・大方広仏華嚴經第十九・二十一帖 (四部一六函10)

○卷十九ノミ靈典筆

(奥書末尾) 于時建曆元年 (1211) 十二月六日未尅也 弘法門人桑門覺舜

14と15は、華嚴經に対して「唐本」をもって校合した奥書を持つ。16は明恵勸進による八十華嚴經書写を行った際のもので、靈典以外の僧侶による高山寺現存本の奥書に以下のような記載がある。

○大方広仏華嚴經 一帖 (第三部48)

(奥書) 八十華嚴挙一部八帙之内明恵房之御勸進 (以下略)

○大方広仏華嚴經 一帖 (第四部一六函12)

(奥書) 于時建暦元年六月廿三日西尅許於梅尾書了／求法沙門行弁

右の二つの資料にみえる記事により、明恵勸進による華嚴經書写が高山寺で行われたことがわかり、靈典はこのかなりの部分を担当していたことが知られるのである。この書写作業に参加したのは、現存本の奥書から見て、行弁(20巻)・成忍(20巻)・靈典(16巻)・覚舜(4巻)・実清(4巻)・聖範(2巻)・道円(2巻)、その他未詳が12巻あり、靈典がこの勸進事業である華嚴經書写の中心人物のひとりとして見てよいだろう。そして靈典自身奥書に「花嚴宗沙門靈典」と記しており、明恵の華嚴の教えに対する忠実さを物語っている。

次の資料は明恵晩年における靈典の活動実態と示すものとして重要な記録で、書写は江戸時代のものであるが、高山寺の学僧の地位を物語るものとして良く知られている。これによれば、義淵房靈典は十八名の着座衆の中の六番目であり高山寺内での地位が高かった(そもそも説戒にはたとえ有徳の人であるとも入山して三年間を経ないと着座が許されない)ことがわかる。⁽¹⁸⁾この説戒においては梵網戒本に基づくものであるから華嚴関係の僧侶が着座していることになる。事実、この中には義林房喜海は見えるが空達房定真の名前が見られない。

17 梅尾説戒日記 一冊 (四部四八函8)

(書出) 自寛喜二年(1230)二月中旬依御不例無説戒事 自／二月晦日至七月晦日兩三度圓道房勤仕其後／相次禪淨房勤仕自同八月十五日上人御説戒／始時尅衆会等如常■彼著座衆／正達房 義林房 圓道房 禪淨房 法智房／義淵房 禪忍房 順行房 恵日房 順正房 十眼房 尊順房 了達房 明淨房 実証房 真教房 戒月房 長円

明恵上人が寛喜四年（貞永元年 1232）に示寂してからしばらく義淵房靈典に関する記録・資料などは見られない。この間、靈典がどのような活動を行っていたかは不明という他はない。ただ、この時期に高山寺内においてかなり大規模な聖教の整理や再編成があった可能性があり、義淵房靈典が中心的な役割を果たしていたことは確かである。⁽¹⁹⁾それが次に示すような一連の記述からわかる。

18 冥報記包紙（重書2〔附〕）

（表書）「甲五十四箱／冥報記唐臨撰 三卷／圓行阿闍梨将来唐人書／建長二年（1250）義淵上人注進」

19 高山寺聖教目録 包紙 一紙（一部244〔1〕）

（表書）「義淵上人／依後嵯峨院之仰注進 十無盡院／建長二年（1250） 殘闕／高山寺聖教目録 自一丁／至廿二丁」

20 聖教目録禪淨房 灌頂 一卷（一部246）

（奥書）（別筆）「建長三年（1251）^亥四月一日重校勘記加之／高山寺知事沙門靈典（花押）」

18から20は、義淵房靈典が高山寺内において聖教目録の整理・作成に具体的に関わった記録として貴重なものである。

18は、唐から将来された冥報記を包んでいる包紙に後世の筆で書き込まれた記事であるが、靈典が「注進」したとあるが、何を注進したものかこれでは意味が通らない。素直に読めば、冥報記そのものを自分より身分の高い人物に「注進」したということであるがよくわからない。⁽²⁰⁾峰岸明氏は冒頭にある「甲五十四箱」という記録に注目し、『高山寺聖教目録』を「注進」した、と解説しておられる。

19と20は、筆者もすでに指摘したことであるが、高山寺の聖教の大規模な再編作業が一大事業として行われた際に、靈典が中心的な役割を担っていた記録と考えられる記事である。この時に初めて「高山寺知事」という署名をつけている。建長二年には空達房定

真、義林房喜海が相次いで示寂しているので義淵房靈典が名実ともに高山寺の最高責任者となったのであろう。目録の整備(と聖教の整理・再編・追加など)も行い、現在高山寺聖教の「古目録」として知られる、『高山寺聖教目録』『高山寺経蔵聖教内真言書目録』が完成し、高山寺の公的な聖教が収められている経蔵の整理が完成した。ちなみに『法鼓臺聖教目録』と『方便智院聖教目録』の完成時期はさらに後年であると考えられる。筆者はすでに、靈典が現存する『法鼓臺聖教目録』には直接的には関わらなかったが、建長頃までには『法鼓臺聖教目録』の前身である『禅上房書籍欠目録』の作成には関わった可能性があることを述べたことがある⁽²¹⁾。

21 密宗要決鈔 卷第廿一 一卷 (一部253〔20〕)

(奥書) 建長六年(1254)十一月十三日於高山寺東谷池坊書写之畢

右の21の奥書にある「東谷池坊」とは義淵房靈典が第一世となる覚蘭院のことであり、ここでの活動が具体的に示されたものといえる。ただ、この建長六年は靈典示寂の前年であり、靈典自身がこの書写に關与(靈典書写、あるいは靈典所持本を書写)したかどうかは不明である。

次の二点はともに同様の奥書を有するもので、正嘉二年静海の書写にかかるものである。もとは嘉禄二年に樋口藏人(覚嚴)が八識あるいは九識についてした質問に対する返答をした(「先師上人」とあることから見て明恵上人本人であろう)ものを高山寺石水院で書写し、天福二年に光弁が書写し、さらにそれを静海が建長三年に写したものを、正嘉二年に義淵房靈典の本を持って校合した、と読める。現在の経蔵ではまったく別の箱に収められているが、本来は22、23ともに静海所持にかかる聖教であったことは明らかである。この21から23の資料はいずれも真言宗系統のもので、特に22、23は事相に関わる聖教であり、これを義淵房靈典が所持していたことを示す点で重要であろう。22は後補表紙のため所蔵をしめす記録が残っていないが、23は裏表紙に「東十六宮卜見／密弁」との書き入れがあり、これを信じれば、元は『方便智院聖教目録』に記載の聖教であったことがわかる⁽²²⁾。

22 字輪観等 一卷（二部68）

（奥書）嘉祿元年（1225）二月廿五日樋口藏人自坂東八九識事相尋申之間御返事^{（被）}彼仰遣日於石水院写了／正嘉二年（1258）五月十六日以義淵房之本交合之處有此日記／之間此八九識事写了 静海記之／写本云／已上天福二年（1234）正月之比抄集先師上人御物語等也／病僧光弁（以上本奥書）

建長三年（1251）九月廿三日於西山梅尾以光弁／上人自筆之草本書之了／仏子静海／一交之了

23 事教相諸義 一冊（四部一一八函67）

（奥書）嘉祿元年（1225）二月廿五日^{（桶力）}樋口藏人自坂東八九識事相尋／申之間御返事被仰遣之於石水院写了

正嘉二年（1256）五月十六日以義淵房之本交／合之所有此日記之間写之了静海記之／写本云／已上天福二年（1234）正月之比抄集先師上人御物語等也／病僧光弁／建長三年（1251）九月廿二日於西山梅尾以光弁／上人自筆之草本書之了／仏子静海／一交之了（以上本奥書）
寛文九年七月六日以石水院経藏之本／写之了／梅尾末子永弁／口不足後日ニ可書入者也

（裏表紙）延享五辰季春欲写藏本之所有此写本歡喜踊躍者也^{東十六宮下見 密弁}

24は、奥書によれば、明恵が様々な仏典の講義あるいは伝授の際に語ったことを靈典が聞書し、光経が類聚したとある。それを方便智院第二世である仁真が書写したという本奥書を持つ資料である。その元となった靈典の聞書なるものは現存しないのは残念であるが、明恵による大日経疏の講義を始めとする様々な聞書を靈典が記録していたことを示す重要な資料である。内容的には、大日経疏の引用等から真言密教に関する聞書であり、靈典が華嚴だけでなく真言における講義や伝授の場にも参列していた事を示すものと考えられる。

24 高山随聞秘密抄 梅尾上人御遺訓抄出 一卷 (四部一四八函34)

(奥書) 本云／正嘉三年(1259)四月 日書写之／此聞書者上人口決義淵房／記之而以光経僧都類聚之／即彼僧都之本一見之次／書止之了 仁真(以上本奥書)

(卷末紙背)(又別筆) ○高山随聞秘密抄 靈典上人

梅尾上人御遺訓出抄 高信上人

最後に忘れてならないのは、明恵上人の残した置文(遺言)である。高山寺には三種類の置文が現存しているが、いずれも原本は伝わらず写本である。三通の書かれた経緯や順序なども確実なことはわかっていないが、本文の内容等により以下の順であることが推定される。⁽²³⁾

25 僧高弁高山寺置文案 (古文書 第一部四二)

當寺住僧事^中

勤杲 喜海 定真 行弁 性実 信慶

此七人中六人者、高尾寺昔久住者也、其内靈典法師、殊當當寺土木之功、巧諸人止住之計、喜海法師、守護正教習学法文、為諸人之導師、當寺人法佛法之繁昌、偏依此兩人之功勞也、(以下略)

建長六年(1254)十月十一日書之了

26 僧高弁高山寺置文案 (古文書 第一部四三)

以此別所、奉申付久住者五人子細事

梅尾別所者、高尾寺之一院也、本山牢籠之時、故本願上人御房御草創之堂舎等、皆以荒廢、於是高弁依一両之同法勸進、申請隱岐法

皇并本山別當・衆徒等、為別所、於是愚身山林隱居依為先、無指付法弟子、義林房・義淵房・上見房・宝智房、當初本山共住之同法也、又近年依遁世之志深、正達房阿闍梨辞本山、隱居當寺、於是義林房從幼年被積聖教稽古之勤、義淵房被當當寺土木功、余兩人又隨分被助當寺造立功、(以下略)

建長六年(1254)十月十一日以御草本書之了

抑今置文者依為當初事後日皆改了

遺弟沙門靜海

27 僧高弁高山寺置文案 (古文書 第二部一〇)(高山寺聖教類第一部三〇五)

奉讓与各々御中

高山寺主人師等職事

右、愚身自壯年昔、辞師違衆、懸思於山林、然高雄牢籠之比、依師命慙領本山、數輩之衆居住辺土、數年以後、又遠離此衆求閑居地、當山無人之昔、依有因縁、一身閑居矣、更不立眷属不好徒党、依身數輩親類等、以其子息面、欲讓与于予、一、以固辞之、此中義林房・義淵房、当初之高雄之久住者也、当山又依為彼一院、兩人居住之、与高雄正達房等同心被勵住持之功、愚身隨喜隨分助其功力經數年之間、檀越投財宝、寺僧勵微力、堂塔并葺、房舍重檐(以下略)

寺主 空達房

学頭 義林房

知事 義淵房

説戒 円道房

同 法智房

(中略)

寛喜四年(1232) 壬辰正月十一日／沙門高弁

(六六)

この中で、義淵房靈典に関わる記事(波線部分)が注目されるのであるが、冒頭でも記したとおり、①高雄で明恵上人と出会ったこと、②明恵上人と古くから行動を共にしていた数少ない僧侶の一人であること、③高山寺内での活動として、特に土木に関して功績があり高山寺の発展に寄与したこと、などが記されている。これに、先に挙げた真言系統の血脈に、行慈の法統を受け継いでいる事などを合わせて、義淵房靈典が元は高雄神護寺の僧であった、という推定がなされているのである。

以上、靈典が直接あるいは間接に関わる資料について血脈を検討し、さらに高山寺現存資料を年代順に活動ごとに検討を加えてみた。

この他に、左にあげた資料は靈典示寂後の書写になるもので数点あるが、簡単に列挙するにとどめる。

28 蒙散澤見 一帖 (四部九三函10)

(奥書) (前半省略)

永仁五年(1297) 七月廿五日以梅尾／池房御本令書写畢 (以下略)

29 大方広仏華嚴經卷第十四 一卷 (四部六函31)

(奥書) (別筆) 「嘉元三年(1305) 乙巳三月七日於高山寺西谷房切／句指聲并一交等了 朝玄／于時恵印房於池房入壇云々」

30 大記等 一帖 (四部一五二函39)

○鎌倉時代初期写、(靈典筆力)

31 小石ノアヒタノ事 一通 (四部一七五函3)

○鎌倉時代中期写、(仁真又ハ靈典筆カ)

32 求聞持血脈 一帖 (四部七六函53)

(表紙見返) 或本云義淵僧正大宝三三十四直紀僧正乃書

これらの中で、32は表紙に記載してある事が何を意味しているのか不明である。28と29とともに靈典示寂後の覚蘭院における活動を示したものである。これによると、覚蘭院代々が依然として華嚴・真言両流にわたった活動をしていることが知られる。

四

以上見てきたように、靈典の活動実態は初期においては不明な点が多いが、明恵上人と行動を共にしてからは、常に明恵上人に付き従って、上人同様華嚴・真言両方にわたる幅広い活動をしていたことが判明する。それは、聖教の書写・校合だけではなく、華嚴・真言のいずれの講義にも出席しており、さらには高山寺隆盛のための土木(寺内の寺院・経蔵等の整備を含むか)についても多大なる貢献があったのである。明恵上人示寂後には大規模な聖教の再編成を伴う聖教目録の作成の先頭に立っていたこともわかる。このような幅広い活動は、置文に示された他の主要な僧侶、すなわち寺主の定真、学頭喜海の両者とは大きく異なるものである。

土井光祐氏は、高山寺内外に現存する聞書資料を博搜され、次のように結論づけている。

高山寺における「講説」と「伝授」の活動は、概ね高山寺内部の塔頭の違いに基づく学統の相違によって、活動内容に著しい差違が認められる。

「伝授」の活動は明恵以後、方便智院を中心とし、十無尽院では第三世の経弁以降に相承されたが、「講義」の活動は、明恵以

降は、喜海、高信、順高といった十無尽院関係の限られた学僧の間でのみ継承され、高信以後は、活動の場を高山寺ではなく神尾山寺に移して実践された。従って、高山寺における「講説」活動の歴史は、実は非常に短期間の、ごく限られた学僧によって行われたに過ぎず、この歴史的事実が現在の高山寺経蔵における「聞書類」の伝存状況にも反映している。

(土井光祐「高山寺関係聞書類の資料的性格と学統——講説聞書と伝授聞書とをめぐって——」訓点語と訓点資料 第九十五輯 平成七年三月 九八頁)

そのような幅広い活動にも関わらず、確かに先に引用した小林芳規氏の研究でも明らかな通り、高山寺内に現存する典籍の種類・量においても、方便智院第一世の定真とその一統による聖教が圧倒的な数を誇っているのが事実である。⁽²⁴⁾喜海とその一統の典籍が高山寺に少ないことについては、右に引用した土井氏の論考にある通り「実は非常に短期間の、ごく限られた学僧によって行われたに過ぎず、」と指摘されており、高山寺に長く足跡を残してはいなかったのである。大いに頷ける点であろう。

さて最後に、霊典がこれまで見てきたように他の学僧と比較して、書写、校合、伝授(受)を始めとする寺内における活動の様相を示す資料はそれほど多く残っていないのも事実である。そこでこれらの論考を踏まえて、霊典に関わる資料の「絶対的な」少なさについて三点にまとめて検討してみたい。

1 高山寺に現存している、先に挙げた霊典関係典籍が、どのように保管されてきたかについてみると以下のようなことが判明する。古目録との対応を見ると、霊典自筆本、あるいは霊典所持本のほとんどが現存本では来歴がはっきりしないものが多い。11の金剛結護普通諸部 一帖(四部一八五函132)の表紙に「真六箱四本之内」とあり、『高山寺経蔵聖教内真言書目録』記載の典籍と判明するほか、14大方広仏華嚴経第六十四 一卷(四部一三函14)に「五十八箱」(白書)「六十四」とあるので、『高山寺聖教目録』の「第五十八乙」に記載の典籍であり、15大方広仏華嚴経第六十一(新訳華嚴経)は霊典校合本には記載がないものの、別の資料の表紙に「乙五十九箱」とあることから同じく『高山寺聖教目録』記載のものといえる。その他には霊典自筆ではないかも知れないが、21密宗要

決鈔 卷第廿一 一卷（一部23「20」）には、「臺第廿六箱」とありこれは『法鼓臺聖教目録 下巻』記載のものであることがわかる。ただし、『法鼓臺聖教目録 下巻』は江戸時代に新たに作成されたものであるので、それ以前にどのように伝存していたかについては不明である。⁽²⁵⁾

このように見ると、靈典関係の典籍は、来歴が不明なものも多く、定真関係典籍などとは事情が大きく異なっている可能性がある。

2 先の1と表裏の関係になるが、元来靈典の書写・所持にかかる典籍があつたのに、いずれかの時期に失われて現存しない、という可能性も考えられる。それは、22字輪觀等 一卷や23事教相諸義 一冊（四部一八函67）の奥書に、「義淵房之本交合之處」とあり、これらは元々靈典が同じ聖教を所持（あるいは書写も）していたことを示している。24高山随聞秘密抄 梅尾上人御遺訓^{出抄} 一卷（四部一四八函34）の奥書にも「義淵房記之」とあり元は靈典作成になる聞書があつたことを示しているが現存しない。このように、高山寺の長い歴史の中で、何らかの理由で失われていったものも相当数あつたと考えられる。

3 靈典の活動そのものが、記録を残すこと自体が重要な、真言密教の事相とは一致しないことがあげられよう。これについては小林氏や土井氏の論考を総合して考えるに、定真とその一統は真言密教の事相に活動の重点を置いており、それはとりもなおさず伝授を中心にした活動であり、法統・血脈あるいは「師資相承」を重視するということである。反対に喜海を始めとする華嚴系僧侶の集団は、「非常に短期間」しか高山寺で活動していない、ということである。そのため、真言系統の典籍とりわけ事相関係の資料は大切に扱われ保管されてきたのであり、相対的にそれ以外の典籍は長い時間の中で次第に失われていったと考えられる。高山寺に現存する古目録と聖教との対応を見ても『高山寺聖教目録』に記載典籍の現存率は極めて低いのに対して、『高山寺経藏聖教内真言書目録』や『法鼓臺聖教目録』に記載の典籍は比較的多く現存している。⁽²⁶⁾

義淵房靈典の高山寺における位置というのは、どのようなものであるか最後に一言する。明恵上人は置文において、寺主を空達房定真と定めた。これは、小林氏が指摘されているように、中世以降の高山寺の活動の最も象徴的な人物であることと一致する。後年

の高山寺は真言密教の伝授を中心とした事相関係に活動の重点が置かれ、それに必要な典籍が作成・保管されてきたのであろう。その法脈を最も色濃く相承したのが方便智院開基の定真なのである。次に、置文で学頭とされた義林房喜海は、土井氏の論考の通り、華厳関係を中心とする、講義を受け、それを元に弟子に講義を授けるという講説の活動を主として行い学問的な先頭に立っていたことがわかる。明恵自身も、喜海には高山寺経営に関わるような活動に関わらせたくないと記しており(置文)それがまさに明恵の学問的活動を継承するに相応しい人物と見なされていた証拠である。

そのような僧侶と学統の間に立って、義淵房靈典は華嚴の講義にも参列し、講義を聞書もしており、また、真言密教の事相関係の聖教の書写もするという学問的活動を行っていた。加えて、高山寺内の経営にも才能を発揮し、「土木の功」を積み、聖教目録の作成にも尽力している。まさに、そのような活動は高山寺活動全般を統括し、下から支える「知事」に相応しいものであったと考えられる。

注

(1) 明恵上人の残した置文による。詳細は後述。田中久夫『鎌倉仏教雑考』(思文閣出版 1982年2月)に全文の翻刻がある。

(2) 徳永良次「高山寺における聖教目録の形成について」(築島裕博士傘寿記念『国語学論集』汲古書院 平成十七年十月 434頁)

(3) 村上素道『梅尾山 高山寺明恵上人』(昭和4年12月) 336頁

(4) 断片的には、次のような論考に『禅上房書籍欠目録』や『高山寺聖教目録』に注記や書き込みがあることが、紹介されている。

奥田 勲「高山寺聖教目録 解説」(『高山寺経蔵古目録』東京大学出版会 1985年2月 278頁)

徳永良次「高山寺初期における聖教の保管と整理——古目録を手掛かりとして——」(訓点語と訓点資料 第一一四輯 平成17年3月60頁)

徳永良次「高山寺蔵『禅上房書籍欠目録』の書き入れについて」(北海学園大学人文論集第二十六・二十七合併号 二〇〇四年三月)

- (5) 石塚晴通「法鼓臺聖教目録 解説」(『高山寺経蔵古目録』東京大学出版会 一九八五年二月 324頁)にあるように、下巻のみ江戸時代の作成にかかるものであるから、所収の点数は鎌倉時代のものとは異なる。
- (6) 「高山寺縁起」はその奥書によれば、建長五年⁽¹²⁵³⁾三月であるので、明恵上人だけではなく、空達房定真、義林房喜海も示寂した後には作成されたものである。
- (7) 徳永良次「『聖教目録^{徳永房}』解題」(『続高山寺経蔵古目録』二〇〇二年三月 東京大学出版会)
徳永良次「高山寺初期における聖教の保管と整理——古目録を手掛かりとして——」(訓点語と訓点資料 第一一四輯 平成17年3月)
- (8) 禅浄房の示寂は寛喜三年と見られ、明恵上人より一年早い。徳永良次「『聖教目録^{徳永房}』解題」(『続高山寺経蔵古目録』二〇〇二年三月 東京大学出版会 83頁)
- (9) 奥田 勲『明恵——遍歴と夢——』(東京大学出版会 一九七八年十一月 234頁)
- (10) 土井光祐「高山寺関係聞書類の資料的性格と学統——講説聞書と伝授聞書とをめぐって——」(訓点語と訓点資料 第九十五輯 一九九七年三月) 92頁
- (11) 奥田 勲『明恵——遍歴と夢——』(東京大学出版会 一九七八年十一月 189頁)
宮澤俊雅「高山寺経蔵聖教内真言書目録 解説」(『高山寺経蔵古目録』一九八五年二月 東京大学出版会 三〇二頁)
- (12) 村上素道^{『梅尾山 高山寺』}明恵上人』(昭和四年十二月)
田中久夫『鎌倉仏教雑考』(思文閣出版 一九八二年二月) 483頁
奥田 勲『明恵——遍歴と夢——』(東京大学出版会 一九七八年十一月 189頁)
- (13) 小林芳規「高山寺経蔵の鎌倉時代の典籍について」(『高山寺典籍文書の研究』東京大学出版会 一九八〇年十二月) 77頁
注2文献に同じ
- (14) 宮澤俊雅「高山寺代々記」(平成六年度「高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集」平成七年三月)

- (15) 高山寺古文書には義淵房靈典が高山寺支配の土地に関して陳情を受けている文書が複数残されていることから、様々な寺院運営に関して中心となつて実質的な役割を担っていたことを伺わせる(高山寺古文書 72 75)
- (16) 文中「義淵上人ノ記ニハ……」のような記事がある。
- (17) 田中久夫『鎌倉仏教雑考』や奥田 勲『明恵——遍歴と夢——』なども、置文の記事が元となっている。
- (18) 置文に「但説戒仁者、若従他所来住人、有其能徳者、住山之以後満三ヶ年後、可被勤行也」とあることによる。
- (19) 注2文献に同じ
- (20) 峰岸明「冥報記 解題」(『高山寺古典籍纂集』東京大学出版会 一九八八年二月) 234頁
- 奥田 勲『明恵——遍歴と夢——』(東京大学出版会 一九七八年十一月) 229頁
- (21) 注2文献に同じ
- (22) 現存する『方便智院聖教目録』(新目録)にはこれと一致する書名は見あたらないようである。引き続き再考してみたい。
- (23) 田中久夫『鎌倉仏教雑考』(思文閣出版 一九八二年二月) 343頁
- (24) 小林芳規「高山寺経蔵の鎌倉時代の典籍について」(『高山寺典籍文書の研究』東京大学出版会 一九八〇年十二月) 77頁
- (25) 注5に同じ
- (26) 『高山寺聖教目録』との対応について、奥田勲氏は現経蔵の七十四函の状況を示した上で「きわめて貧弱というべきである上に、箱によつては全く現存本を見出せないものもある」とし、『高山寺経蔵聖教内真言書目録』との関係では、宮澤俊雅氏が「容易には知り難いが、大部分は現経蔵内に現存しゐるものと思はれる。」と述べておられる。さらに石塚晴通氏は『法鼓臺聖教目録』との対応について「一体に、法鼓臺聖教目録所載本は、高山寺聖教目録所載本より現存の割合がはるかに高く……(中略)……過半の現蔵を確認し得る。」とされており、筆者の推論を裏付けると言えよう。(引用はすべて『高山寺経蔵古目録』解説(東京大学出版会 一九八五年二月))

〔付記〕

本稿を作成するに際しては、高山寺に現存する資料を利用させていただき、高山寺の関係各位および高山寺典籍文書綜合調査団の方々に格別のご高配を賜りましたので感謝の意を表したいと思います。尚、本稿は平成十九年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「聖教目録の形成過程からみた高山寺資料の性格と学統の関わり」(課題番号18520361)の成果の一部である。